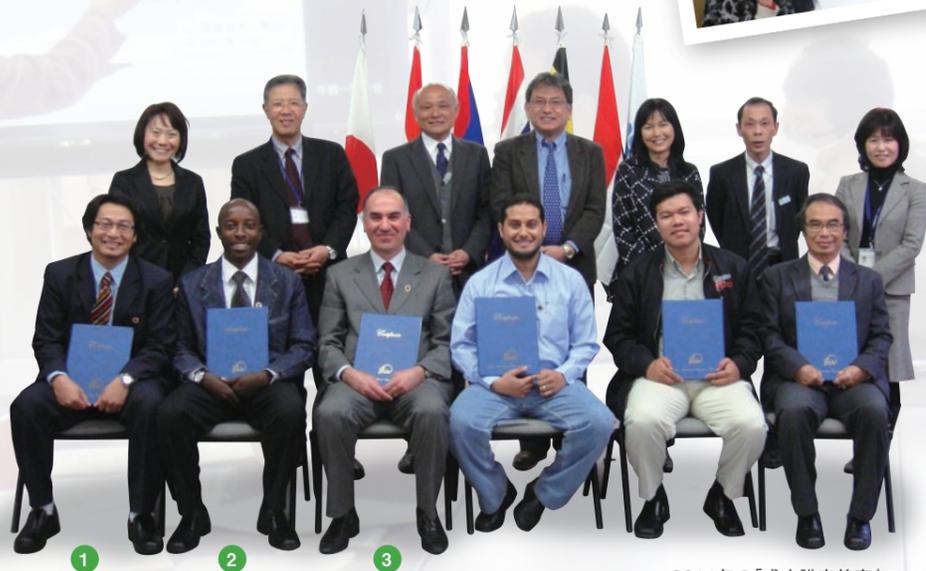


識字学級の学習者たちと歌や踊り、
作品づくりなどで交流



研修員の声



2011年の「成人識字教育」コースの参加者(前列)

1 ラオス教育省 センガロン・バウトサディーさん

成人に対する識字教育は、今まさにラオスも強化している分野です。しかし、教材やカリキュラムなど改善すべき点が多く、日本とタイの取り組みを参考にできればと思い研修に参加しました。大阪の視察先では施設も教材も学習者の能力に沿ったものになっていて、教える側が指導しやすい環境づくりがされているところに感銘を受けました。ラオスで使えそうな素材もたくさんあ

たので同僚たちとも共有し、まずは教材の改訂に取り組んでいるところです。他方、タイでは識字教室の指導者の資格制度を明確化していたので、彼らの採用しているシステムを参考に教員の質を改善したい。今後はASEAN(東南アジア諸国連合)域内でも情報を共有して連携を強化しながら、ラオスはもちろん、アジア全体の識字率向上を目指していきたいと思っています。

2 ウガンダ・チエゲア県庁 ディクラーク・アシムウエさん

ウガンダでは非識字者の多くが農村の貧困層ですが、コミュニティーレベルでの連携体制が弱く、本当に必要としている場所に識字教育の普及が進んでいません。日本では自治体とNGOが相互補完しながら識字学級を運営しており、私たちが強化すべきなのはやはりここなのだと思えました。また、コンピューターやテレビなどのマルチメディア教材は、楽しく効果的に学ぶために

必要な工夫だと感じました。大阪では10年以上も識字学級に通っているという人もいて生涯学習になっているのも素晴らしいですね。帰国後は10のパイロット地区で識字教室のモニタリングを始めると同時に、新たに3つの成人識字教室を開設しました。そのほかにもラジオを活用した普及活動など、より幅広い層に識字教育について知ってもらう方法を模索しているところです。

3 イラク・クルド自治区教育省 ノザード・サイド・アブデルラーマンさん

イラクはアラブ諸国の中でも成人識字率が低く、UNESCOの推計によると、成人の約2割が読み書きができないとされています。これまで10年以上、成人を対象とした識字教育の普及に携わってきましたが、識字についてはもちろん、教育全般についての知見を深めたいという思いで日本に来ました。大阪にはイラクと同様、さまざまな境遇や年齢の学習者がいましたが、学習者の

ニーズに応じて多様なプログラムが提供されている点が素晴らしいと思いました。そして何よりも感動したのが、自治体、NGO、学校の連携。地域の人々が一つの「チーム」となって識字に対する思いを共有している点は見習わなければなりません。イラクも将来的には大阪のように、識字教室の期間や場所を限定的なものせず、すべての人にオープンなものとしていきたいと考えています。

大阪発

識字教育のノウハウを途上国へ

100%に近い識字率とされる日本。しかしその裏側では、被差別部落など社会的に不利な立場にいる人々、障害者、外国人などに対する識字教育が各地で行われてきた。JICAは大阪教育大学と協働で課題別研修「成人識字教育」コースを実施している。

夜
の
教
室
で
読
み
書
き
を
学
ぶ

平日の午後7時。東大阪市立長栄中学校に足を運ぶと、煌々と明かりが充ちた教室が見えた。日中は中学生で埋め尽くされるこの学校は、夜になると一転、成人を対象にした「夜間学級」になる。

子どもの時、何らかの理由で学校に行けなかった人、病気などで中退してしまった人、身体が不自由で普通学級に入れなかった人；さまざまな境遇と年齢の人々が、週5日午後6時から3時間、机を並べて学ぶ。カリキュラムには中学校の一通りの科目が含まれているが、その中でも、社会生活を送る上で必要不可欠な読み書きに対するニーズは高い。

「日本は識字率100%だと思っていたので、今でもこのように地道に識字教育が行われているのに驚きました」。ウガ

日本の識字教育の基礎となる小学校も訪問



ンダ、イラク、ラオス、イエメンの教育関係者たちは一様に驚いた様子。彼らはJICAが大阪教育大学と協働で実施している課題別研修「成人識字教育」コースの研修員たち。開発途上国の成人識字教育に役立つアイデアを日本でも学んでもらうために、2010年に始まった研修だ。

そして、その舞台に選ばれたのが大阪。日本国内でも成人識字教育が盛んな地域の一つだ。1960年代から社会的に不利な立場にいる人々を対象に

した識字教育を推進してきた大阪は、1990年の「国際識字年」を契機に「おおさか識字・日本語センター」を設立。自治体・NGO・学校がネットワークを確立し、地域ぐるみの取り組みを強化している。現在も11の公立中学校の夜間学級をはじめ、公民館などの日本語教室や識字学級、ボランティアによる日本語教室などが200カ所以上で開かれている。

学習者のニーズに応じた取り組みを強化

コースリーダーを務める大阪教育大学の森実教授によると、「大阪の識字教育は他の自治体と比べても実に多様で、運営体制、開催場所、費用負担、学習内容など、各地域が学習者のニーズに応じて対応しています。また、授業も、単に文字の読み書きだけでなく、地域が抱えている問題などを含んでいる

のが特徴です」と話す。研修員たちは大阪各地の識字教育の現場を訪問し、「地域の人たちや学習者から、自分たちが教室を良くしていくんだ」という強い思いを感じたという。「行政の能力強化だけでなく、草の根レベルでのオーナシップも大切なのです」と納得していた。また、日本に来る前に2週間、タイの山岳地帯の少数民族や農村部、都市部のスラムなどの成人向けの識字教室も視察。途上国の中でもいち早く、90年代から識字教育の普及に積極的に取り組んできた同国の取り組みを学んだ。

「タイで成人識字教育の基礎を学び、日本の研修でさらにその発想を広げてもらうことが目的です」と森教授は話す。

大切なのは、地域が一体となって識字学級を育てていくこと。日本とタイでの研修を経て、ラオス教育省のセンガロン・バウトサディーさんが作

成したアクションプランに含まれていたのは「識字学級の講師の食事を地域の人たちが準備する」という計画だった。森教授によると「大阪のある教室では若い講師が仕事後に食事をしないまま来るので、それを見かねた学習者の一人が毎回食事を用意してくるようになった。このエピソードを本人たちから直接聞いた研修員は、学習者の含む地域の人々に識字教室の運営に携わってもらうためにラオスでもできる効果的な手段だと考えたようです」という。

JICAの研修での学びを糧に、研修員たちは自国で成人識字教育の普及に奔走している。



中学校の夜間学級では、生徒の生い立ちや学習の喜びについて聞いた